

東三河 地域研究

平成26年9月16日発行

編集・発行：

公益社団法人東三河地域研究センター
住所／豊橋市駅前大通二丁目46番地
(名豊ビル新館6階)

TEL／0532-21-6647

FAX／0532-57-3780

通巻128号 2014. 7

公益社団法人東三河地域研究センター

東三河地域問題セミナー第3回公開講座

講演1:「地域の防災力を高めよう～過去の災害現場から学ぶ～」

特定非営利活動法人レスキューストックヤード

代表理事 栗田 暢之 氏…… 2-13

講演2:「歴史地震記録に学ぶ防災・減災ガイドについて」

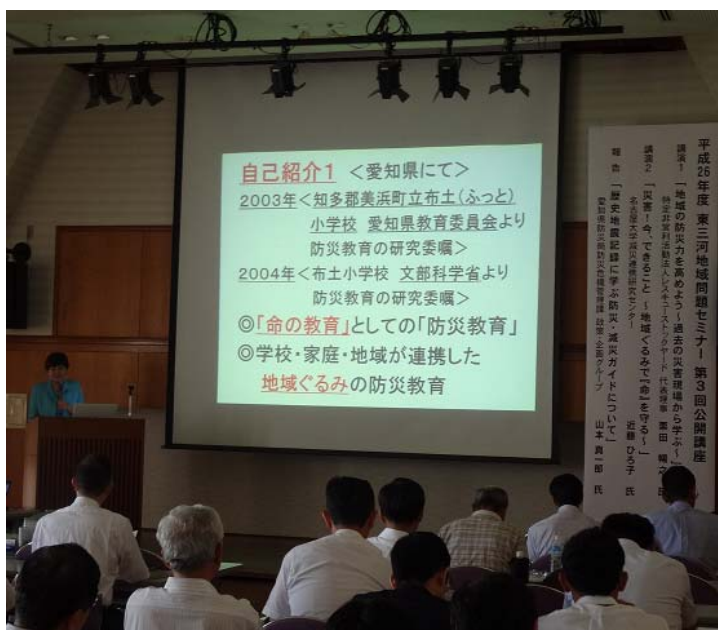
愛知県防災局防災危機管理課 政策・企画グループ

山本 真一郎 氏……14-15

講演3:「災害！ 今、できること ～地域ぐるみで『命』を守る～」

名古屋大学減災連携研究センター

近藤 ひろ子 氏……16-24



平成26年7月1日開催 東三河地域問題セミナー第3回にてご講演される栗田暢之氏、近藤ひろ子氏

公益社団法人東三河地域研究センター 東三河地域問題セミナー第3回公開講座

講演1：「地域の防災力を高めよう～過去の災害現場から学ぶ～」

特定非営利活動法人レスキューストックヤード 代表理事 栗田 暢之 氏

講演2：「歴史地震記録に学ぶ防災・減災ガイドについて」

愛知県防災局防災危機管理課 政策・企画グループ 山本 真一郎 氏

講演3：「災害！ 今、できること ～地域ぐるみで『命』を守る～」

名古屋大学減災連携研究センター 近藤 ひろ子 氏

平成26年7月1日（火）14時～16時30分 豊橋市民センター6階多目的ホールにて講演を行った。

講演1「地域の防災力を高めよう ～過去の災害現場から学ぶ～」

特定非営利活動法人
レスキューストックヤード
代表理事 栗田 暢之 氏



1. はじめに

ご紹介いただきました栗田と申します。来年1月は阪神・淡路大震災から20年になります。私は、阪神・淡路大震災を契機にこの活動に取り組み、2003年に当時勤めていた大学を辞めて、この活動に専念して12年ほどたちます。そのときは東日本大震災のようなショッキングな地震が来るとは思っていませんでした。私はボランティアとして、さまざまな現場でできる範囲の取り組みをやってきた中で、東日本大震災を踏まえ、改めて私たちは何をすればいいのかが日々問われていると感じています。

その一つとして、東日本大震災発生後、社会福祉協議会、NPO など、さまざまな非営利の民間セクターがもっと集結したほうがいいという議論が高まり、東日本大震災支援全国ネットワークを立ち上げました。そのキャンペーンの一環として、震災の風化が激しい中で、こうした講演会では必ず「Walk with 東北」というロゴマークを見せて、全国で広めていこうという取り組みをスタートしています。



図1 「Walk with 東北」

2. 防災(地震)に関する意識調査

ご承知のように、この地域には南海トラフ巨大地震といった大きな災害が懸念されていますが、これ

が起きると非常に壊滅的な被害になると、国からの被害予測が発表されています。もちろん、東三河地域も震度6強、7で、津波が襲い、また中山間地にも大変な揺れが襲いますので、豊橋の市街地では阪神・淡路大震災のような都市型の状況、中山間地では中越地震のような土砂災害の状況、そして津波は東日本大震災の状況という非常に恐ろしい事態が東三河地域にも想定されているということです。

愛知県では2年に1回防災アンケートをとっており、愛知県民が地震防災にどういう意識でいるのかわかりますが、東海・東南海地震に関心があると答えた県民は9割以上と驚異的な数字であり、他の環境問題、人権問題、国際協力などへの関心度はこれほど高くはありません。これは愛知県や国が、南海トラフ巨大地震を含めて大きな地震が来ることを知らしめている成果が出ているのではないかと思います。

ただし、愛知県民の3割は備蓄食糧を用意しておらず、また1981年以前の木造住宅の居住者に限って無料の耐震診断を実施していますが、その7割の人が受けていません。建築基準法が改正される前の古い木造家屋は、行政が無料の耐震診断を実施していることを知りつつも、診断を受けてもどうせ駄目に決まっていると最初からやらないという方も多いです。さらに自宅の家具の転倒防止をしていないと答

防災(地震)に関する意識調査			
愛知県データより抜粋			
質問項目	2008年	2010年	2012年
東海・東南海地震に関心がある	94.9%	93.9%	95.0%
備蓄食糧／用意していない	35.4%	37.2%	32.5%
無料耐震診断を受けていない (1981年以前木造住宅居住者)	70.6%	65.5%	70.5%
自宅の家具などの転倒防止／していない	54.6%	51.2%	44.8%
自分が住む地域に自主防災組織があるか／知らない	—	57.1%	61.4%

※愛知県の自主防災組織率98.9%・全国1位(H21.4.1現在)

図2 防災(地震)に関する意識調査

3

ピン抜いて、はいホース向けて、はい握ってと指示するのです。「ちょっと待て、すぐ手伝うな、口出すな」と書きましたが、知識のあるものが手取り足取りしてしまっただけで参加者には何も残りません。本番の時はおばあさん一人で頑張らないといけないわけで、そういう土壌をなかなかつくりきれてないというのが地域の防災訓練の課題だと思います。

二つは、消火器の使い方を学ぶというのは非常に大事なことです。ただやり方がおかしいです。本当の火災現場で一番大事なのは、どこに消火器があったかを認識しておくことが非常に大事ですが、訓練会場にはこうした消火器が並べられており、取り扱いの訓練になっています。

三つは、現場と違う最も大きな点が、ギャラリです。本当の現場は血を流している人、へたり込む人、泣いている人など、本当にきつい状況ですが、そうした緊迫感がほとんどないというのが、現場を見てきたものとして感じざるを得ません。阪神・淡路大震災では救急車や消防車が全く来てくれない、生き残った者同士が助け合うしかなかったのです。



図4 水消火器の訓練

4. 実際の災害現場

豊橋市は人口 38.5 万人ですが、救急車は予備を含めて 10 台しかありません。それでも、日本の消防力はとても優秀で、電話が入ってから現場到着まで全国平均 7 分です。こんな国は他になく、ふだんはそういう消防力で私たちの暮らしが守られています。ところが災害時になると、道路は寸断され、通報順に行ってもそれが到着できるとは限らず、どんどん遅れていきます。そういう現場がまさに都市型災害と言われた阪神・淡路大震災の現場で、救急車、消防車が全く来てくれない、生き残った者同士が助け合うしかなかったのです。

新潟県中越地震では、みんなにご飯を食べさせないといけないから、古い米でもいいからある人は米を持ってきて、大きな釜がある人は出して、薪スト

ーブがある人は持ってきて、あとは何も言わなくてもみんな使えそうなものを持ち寄って、薪を割ったり、水をくんだり、食事をつくったり、できることをできる範囲でやっていました。他の地域は、電気が止まり、エアコン類は全く使うことができませんでした。公民館はみんなエアコンに変えてしまっていたため、ほぼ暖房がなく、石油ストーブが 1 台あったので、燃料のない中、少しずつ使ったというところもありました。

この地域は、何も言わなくてもみんな使えそうなものを持ち寄ってくれたというのが、地域力です。それぞれ薪を割ったり、水をくんだり、食事をつくったり、できることをできる範囲でやっていたということは、学ぶべきことが多いと思います。東三河地域の中山間地では支え合いの中での暮らしがもともありますから、こういうことができるはずですが、問題は、都市型の、隣は何をする人のような無縁社会の中で生きており、地域のつながりがほとんどないところで、こういう助け合い、支え合いができるかどうか難しいところです。

先ほど内閣府が南海トラフ巨大地震の被害想定を出し、各自治体では早速、今までの 3 日分の食料・水の備蓄を、1 週間分、10 日分に変えました。そのことも正論ですが、私が見てきた現場でもっとも大事なのは、分かち合うということだと思います。それぞれが備蓄するのはできればいいですが、それが持ち出せなかったのが津波災害、阪神・淡路大震災での災害です。備蓄していたけれども津波等で無くなってしまった人たちがたくさんいて、そういう人たちは、分かち合っていました。この地域力がすごく大事だということを私は現場から学んできました。

能登半島地震では、地震直後から何の指示もない段階で地域の民生委員が安否確認に動いていました。また東日本大震災での避難所では特定の者が指揮をとるのではなく、住民同士の相互理解の助け合いの心が一番必要でした。避難所運営は地域力に勝るも

実際の災害現場

- 救急車や消防車はまったく来てくれない。生き残った者同士が助け合うしかなかった。(阪神・淡路大震災)
- みんなにマンマ食わせねばなんないから古い米でもいいから、ある人はもってきて。大きな釜がある人は出して。薪ストーブがある人は持ってきて。あとは何も言わなくても、みんな使えそうなモノを持ち寄ってくれたし、薪を割ったり、水をくんだり、食事を作ったり、できることをできる範囲でやっていた。(新潟県中越地震)
- 地震直後から、何の指示もない段階で、地域の民生委員さんが安否確認に動いた。(能登半島地震)
- 避難所では特定の者が指揮を執るということではなく、住民同士の相互理解と助け合いの心が一番必要であった。避難所運営は地域力に勝るものなし。(東日本大震災)

図5 実際の災害現場

のなしということを実際の現場で見聞きしてきました。

5. 都市型災害の「都会の闇」

ただし、都市型災害の都会の闇の部分もあります。平成20年8月末ごろ、岡崎市に146.5ミリ降り、豊橋市もかなり雨が降ったと思います。岡崎市はボランティアセンターができて、私共のスタッフも駆けつけ、災害復旧に参画させていただきましたが、実は名古屋市でも内水氾濫がありました。名古屋市は広く、100万世帯あり、結果としてその100万世帯のうち1,200世帯の浸水被害がありました。

この浸水被害は、日々増えていき、最終的な数がわかってきますので、その場ではどこが浸かったのかは、なかなか迅速に正確な情報を収集することは非常に難しい作業です。しかも内水氾濫は、堤防の決壊ではなく、50ミリの下水管がいっぱいになり、下水管で排水が出来なくなり、あふれてくるという状況です。昔は田んぼや畑が吸収してくれたのが、アスファルトで囲まれているので水が行き場を失い、そうすると低い土地に建っている新しい住宅から順番に浸水被害があつて、結果的に1,200世帯の浸水被害がありました。

こうした中、ある商店街に水が入ってきましたが、水が入った次の日からコンビニエンスストアは平常通りの営業をしました。すばらしい復旧力で、全国から瞬時に応援に駆けつけて、濡れた商品は即座に片づけ、床は水切りモップを皆さんで引いて、雑巾がけをして、まるで何事もなかったかのように復旧が行われました。私たちが現場に入っていくときには、かなりその復旧状態の濃淡がはっきりしました。

また、中川区という住宅街が、ひどく浸水していると名古屋市から情報提供いただき、町内会長の了解を得ながら現場に入っていました。私たちボランティアも勝手に町内に入ると怪しまれ、悪徳業者が来たと勘違いされます。そのため、なるべくボランティア側も地域の行政の方々と一緒に回って、そうした了解を得ながら、共同作業の中でボランティア活動を進めています。そこで中川区のある町内会長のお宅に行き、話を伺ったら、「我が地域は浸水被害はありませんでした。」という回答でした。ところが名古屋市の報告で、その周辺が浸かっているという情報を得たので、その辺を歩いていくと、既に被害があった家は、玄関を開けて畳を出して、コンクリートブロックの壁に立てかけて干してあるような状態がいくつもありました。そこで、「お手伝いに来ました。」と言うと、「よく来てくれた。」というところもあるし、「うちは結構です。」「隣のほうがもっと

ひどい。」などの話もそれぞれあり、できるところからできる範囲で手伝いをして、災害で使えなくなったものを集積場所に運んだり、雑巾がけをしたり、さまざまなボランティア活動を展開していきました。

その中で図6の古いアパートに差しかかりました。ここの町内会長は、「うちの町内会に被害はない。」と言っていました。このアパートは奥に6部屋あり、使っている部屋は2部屋だけで、角部屋のところに行ったら、テレビの音がするので入っていったら、独居のお年寄りの男性が濡れた畳の上で靴を履きながらご飯を食べていました。そこで男性の方に「今なら20人くらいいますから、ざっと片づけしましょうか。畳が濡れていますから不衛生です。」と言うと、「いや、心臓が悪いから、ぼちぼち一人でやろうと思っている。」という返事をします。それで、どうしてもなにかいろいろ話を進めていくと、「ありがたいのだけどこくらいかかるのか。」という話になり、「ボランティアですからもちろん無償です。」という話をして、それでやってもらおうと話がまとまり進んでいきました。その中で掃除をしている最中に、「向かい側の角部屋に人が住んでいるのだが、さっきから音がしない。水がざぶんと来たときには大丈夫かと声かけたのだが、全然声がしないんだよ、死んでいるかも。」という話をし始めるのです。ちょっと待ってくださいということで、大急ぎで大屋さんに事情を説明したら、「私も朝早くから開けなさいと言っているのだけど、全然出てきやしない。絶対中にいる。」と言います。

私も経験上、いろいろな現場に行っていますが、私たちのようなおじさんや大屋さんより、女子大生のような優しい女の子が声かけたらドアが開く場合があります。そうやってもらったら、カチャンと開き、おじさんが出てきて「大変だった。」と言います。見たら、やはり、ふだんからゴミの山のような生活なので、ボランティアが片づけをしました。

都市型災害の「都会の闇」



- 平成20年8月末豪雨
- 名古屋市約1200世帯(100万)が浸水被害
- 町内会長曰く「我が地域は浸水被害はない」
- 独居世帯の浸水被害が続々と明らかに
- ボランティアに「いくらかかるの？」
- 無縁社会は現実課題

図6 都市型災害の「都会の闇」

もっとひどいところがたくさんありましたが、こういったことと、町内会長が「我が地域には浸水被害はありません。」と言ったことは、どういうことだったのかと思います。地域って何だろうという「都会の闇」を見ました。ふだんから孤立状態で、無縁社会の中で一人で生きている、あるいは尋ねてくる人もなかなか少なく、ボランティアという存在も知らないのか、だれに頼んだらいいのかもわからない。そういう状態で都市にはいろいろな方が住んでおり、ボランティアが行かなければこの方々はどうしていたのか、そして、これが南海トラフ巨大地震なら、生き埋めになっても発見されずにいる方もたくさんいらっしゃると思うと、ぞっとします。そういう意味で、今日の非常に大きなテーマとなっている、『地域の防災力を高める』は、地域にどういう課題があるのか、どうやって達成していけばいいのかということ非常に大きな課題としてとらえていただきたいと思います。

6. 津波の避難行動（できるだけ高く、遠く）

地震にはさまざまな現象があり、一緒にして話すことは出来ない、まずは津波について話します。要は逃げるしかないということです。津波による被害は、多分油断が半分以上あったと思います。私たちが津波が来るということをどれだけ認識していたのか、専門家ですら3階へ逃げれば大丈夫だと言って、3階に逃げる訓練ばかりしていました。しかし3階にも車が突き刺さりました。そういうことを想定外と言われて久しいですが、こういうことも起こり得るということを南海トラフ巨大地震の前の東日本大震災が証明してくれました。本当に大変なことが起きたことを私たちは十分に認知するべきです。

また、私も縁があって宮城県の七ヶ浜町というところに、今もスタッフを常駐させて支援を継続しています。2006年に七ヶ浜町の防災講演会で呼んでいただき、そのときに町長から、宮城沖地震の発生が

99%と言われていますが、七ヶ浜町は全国で無名な地域なので、ぜひ応援に来てくださいという約束をしていたのです。その約束を果たすべく、地震の次の日に先遣隊を派遣して、当時名刺交換した七ヶ浜町の関係者のコピーをみんな持って現場に入り、社会福祉協議会とも出会って、ぜひ来てくださいということで、ここに支援を決めました。もっと違う現場がよかったのではという葛藤はありましたが、約束を果たすということと、七ヶ浜町も100人以上亡くなっていますので、無名でも大変な被害があったということです。

そこから私たちがいろいろ学びを得たのですが、七ヶ浜町の唯一の町営住宅では、3階部分まで水が来ています（図8の上の写真）。12.1mの津波が来た状況で、皆さん油断していたけど、ふだんから津波は戻ったら危険だと認識していた方が多くいました。ある方は、障害者のダウン症の娘を抱えていながらも、ふだんから防災訓練に一生懸命参加して、夏公園までとにかく逃げようと申し合わせをして、娘も夏公園に向かって、お母さんも仕事先から夏公園に向かって、そして家族が抱き合って喜んだという方もいます。こういう生の話を聞くと、やはり訓練は大事ということが伝わってきます。

ちなみに図8の下の写真は群馬大学片田先生を通じてお預かりした釜石の奇跡で、最終的に避難先から石材店まで行く瞬間をとらえた写真です。よくこんな写真を撮ったと思いますが、この中学生の働きで、2,000～3,000人の地域住民全員と隣の小学校の全員の命を救ったという釜石の奇跡です。片田先生とも大分古いつき合いなので、震災の2日後の夜、片田先生から釜石で足止めを食らっているという電話があって、「おれは防災計画を懺悔してやめる。自分たちが全く役に立たなかった。」と向こうで泣いていました。そのときは釜石の奇跡という状況を知りませんので、とにかく津波で、多くの方が亡くなったという情報しかありませんでしたから、気落ちさ



図7 東日本大震災での七ヶ浜町の津波被害の様子

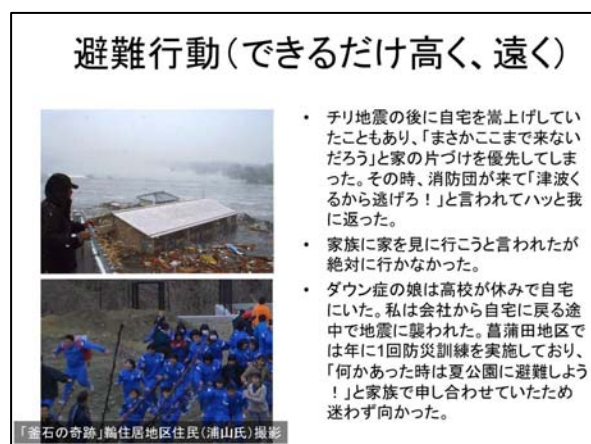


図8 東日本大震災による津波に対する避難行動

れていましたが、中学生が頑張ったという釜石の奇跡があって盛り返しました。しかし、片田先生は「釜石の奇跡と呼ばないでほしい。釜石も1,000人以上死んでおり、中学生が頑張ったことを奇跡のように持ち上げるのはやめてほしい。」と言われました。

被災地では、沿岸部に住んでいたからお前が悪いという話は通用しません。そこに住んでいる以上、揺れたら逃げるという教育をもっと徹底させないといけないと私たちは思います。人間の生き死になんて、本当に運不運があるということが現状です。でも、自分たちでできる限りのことをやって、それがすばらしかったのが釜石の奇跡で、この部分を私たちは学ばなくてはならないと思います。

7. 揺れへの対応

ただ、津波の前に揺れが来ますので、この揺れに対してはほとんど手の打ちようがありません。ある被災者の方から、「最初の揺れは6分ほどの揺れでした。宮城県沖地震も経験しましたが、揺れの大きさは同じくらいでしたが、長さが全然違いました。その後の揺れは余震です。1分後、3分後、5分後とひっきりなしに起こりました。」という言葉いただきました。私はこの方に、「地震の揺れてどのくらい長かったのですか。」と聞いたら、「ずっと揺れていた。最初の揺れが止まったかと思ったら余震がしょっちゅう来るので、どこで止まるか自分たちでわからず、強いて言えば最初の揺れがすごい長かった。」と言っていました。場所によっても変わり、最初は5分くらいと言われているが、この人は確信を持って6分と言っていました。自分でどのくらい揺れているか見ていたのだと思います。

南海トラフ巨大地震も東日本大震災と構造は同じですから、そういう長い揺れが続くと思います。一方、阪神・淡路大震災は10数秒くらいだったのですが、東日本大震災はその20倍くらいと、かなり長いということを被災者の生の声から私たちは感じるこ

とができました。

また、別の被災者の話では、「何か落ちてきたら怪我をするという恐怖感があったので、テーブルの下へ母と一緒に潜りましたが、脚を押さえていてもテーブルごと動くのです。」という言葉がありました。脚を持ってテーブルを押さえないと言っていたのですが、それごと動くということです。本当は座敷机のようなものがないというようなことが生の声ということです。

揺れといえば阪神・淡路大震災です。図10は阪神・淡路大震災の写真で、左上は木造家屋が非常に危険なことを教えてくれます。左下は阪神高速道路で、鉄骨があるので大丈夫と言われていた構造物も、こんな信じられない、安全神話の崩壊と言われた現場の写真です。右上はブロック塀が自分の敷地の外に倒れている写真で、ブロック塀はこのように作られているので、道を通るときはこれが一番危ないです。右下は火災の状況で、都市には危険がいっぱいあります。

その他、図11のように、自動販売機は数えたらきりがありませんし、施設内も散乱します。1回の地震でこんなふうになってしまうのだということを考えると、私たちはどうやって命を守ればいいのかと



図10 阪神・淡路大震災での地震による被害の様子①



図9 東日本大震災での七ヶ浜町の地震による揺れの被害の様子



図11 阪神・淡路大震災での地震による被害の様子②

ということになります。

8. 他の震災での死因

阪神・淡路大震災で有名な話ですが、ほとんどの方が圧死・窒息死で亡くなって、ここの対策を進めないとどうしようもないということがあるので、図12のアンケート調査で、耐震診断や、家具止めしたかという項目が出てくるのです。ところが、そういうことがなかなか具体的な行動に結びついてないということが非常に大きな課題であることを、こうした事例から理解していただくようにしています。

私たち自身の最も大事な命をどう守っていくのかは、非常に大きな課題ですが、私たち自身の問題だけではなくて、子供たちの命をどう守るか、大人がどういう見本を示すことができるのかが大きなポイントと考える次第です。

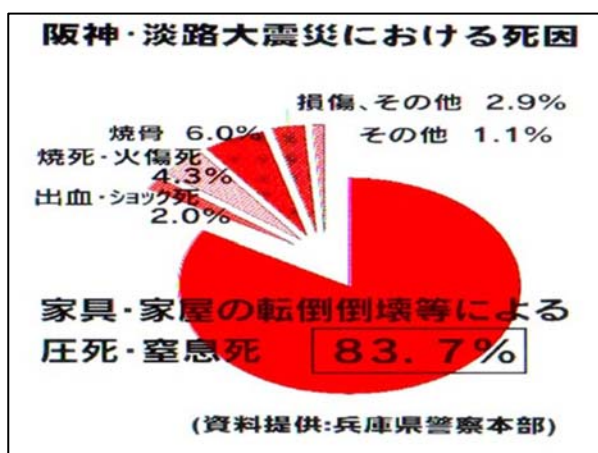


図12 阪神・淡路大震災における死因

図13は、河田先生が出された資料で、阪神・淡路大震災で要救助者が3万5,000人いて、約8割は地域住民によって救出されて、自衛隊・消防隊が23%という有名な数字です。先ほど豊橋市で、救急車10台ということがありました、やはり自衛隊・消防隊だけでは災害時の応援には足りません。しかも自衛隊・消防隊では間に合わない、救出した半分が死んでしまった一方、地域住民で救出した8割は生存していたということで、隣近所同士で助け合うしかなかったということです。

兵庫県の舞子高校は、日本で唯一環境防災科を持っている高校です。ここの生徒たちも、今は消防士になったり、NPOで働いている仲間もいたり、大人として頑張っていますが、当時小学校1年生だった生徒もいて、その生徒たちの年齢層は、最後の記憶者と言われています。その最後の記憶者が舞子高校を卒業するときに、名古屋にその生徒を呼んでイベントを行いました。そのときに、小学校1年生のときの記憶に基づいて、ある生徒が「私の家族は4人

家族で、お父さんとお母さんと私とお姉ちゃん、4人とも何とか無事でした。お父さん、お母さんはすぐに外へ出て、たくさん家が壊れている様子を見て、自宅にあったスコップを持ち出して近所の人を助けに出かけました。私もついていきました。お父さんとお母さんは好きな人から助けました。」と言いました。この「好きな人から助けました。」ということ、小学校1年生のときの記憶の中でお父さんとお母さんがしたという、少し怖く、とても考えさせられる話です。

近所で助け合うしかないといいますが、逆に言うと、ふだんから近所の仲がよくなないと助けてもらえないということです。これは冗談のような本当の言葉で、先ほどの無縁社会はともかく、地域づくりの根底をどう考えるかということ、非常に大きく示唆しており、しかも、人の命の問題ですから、急がないといけません。



図13 阪神・淡路大震災での要救助者の状況

図14は西村先生という監察医のデータですが、阪神・淡路大震災で1月17日午前5時46分の発生から6時までの間で96.3%が亡くなっています。ほとんどが即死で、正確には窒息死です。自分の胸に、呼吸ができないくらい、重いものがのしかかってきて、息ができずに亡くなっていく窒息死が一番多かった。15分という時間帯は少し長く、本当は2、3分で亡くなった方も多いと西村先生は言われていますが、よくわかりません。でも人の命の問題なので、ほんのわずかでも可能性があったら引っ張り出して蘇生することが大切と考えます。その中で、タイムリミットが15分の中で、だれが助け出せるのかといえば、地域社会しかないです。時間帯によっては学校、職場を含む地域社会の中でどうやって助け合えるのか、そのときに、AEDはどこにあるのかと言っているのはもう遅いです。火災を発見したときに消火器がどこにあるか知らないということではいけません。こういう現場に即したさまざまな防災に

対して認識を深めていかなくてはいけないのではないかが大きな課題です。

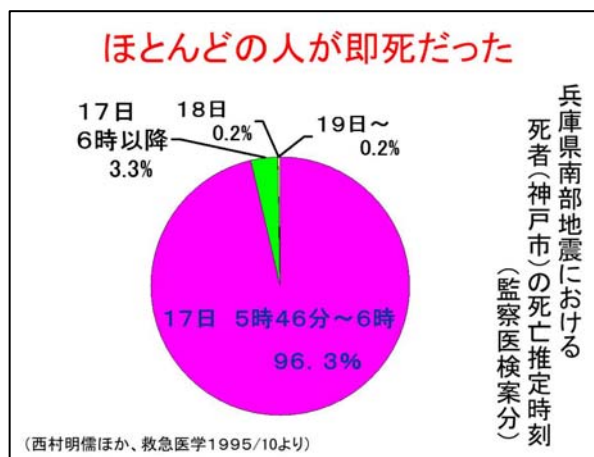


図14 阪神・淡路大震災における死者（神戸市）の死亡推定時刻

9. 液状化・斜面崩壊・火災への対応

地震により液状化、火災、斜面崩壊もあります。図15の写真は、平成16年10月の新潟県中越地震で崩れた土砂の中で当時2歳の男の子が発見された現場です。今も元気で、おじいさんとおばあさんが大事に育てています。この災害では、お姉さんとお母さんが亡くなりました。



図15 新潟県中越地震の様子①

図16の写真は山古志村です。同じく新潟県中越地震で、地震の前は青々していた斜面が、全部斜面崩壊しました。写真に家がありますが、全壊扱いです。斜面崩壊で底が落ち、傾いています。山のほうでは盛土なのか切土なのかを意識して家を建てないといけません。

また写真では、ぐにゃぐにゃに曲がったガードレールがありますが、新しくつくった道路はアスファルトがはがれ落ち、ほとんど壊れました。しかし、昔からの道は獣道みたいなものが多く、軽トラック1台通れるかどうかですが、その道は壊れず、その道が命をつなぎ、その道を通して隣村に助けを求め

に行きました。

山古志村は、長島さんという有名な村長のご英断で、全村避難を早くから決めて、牛もヘリコプターで26億円かけて避難させました。そうした英断を下された山古志村ですが、被害の実態は、全部斜面崩壊で、人工でつくったものはことごとく壊れたという結果が残りました。



図16 新潟県中越地震の様子②

10. いのちを守るために

図17のように、命を守るためにできることはさまざまあり、そのために防災・減災活動を地域が主体となって行っています。かけ声はだれでもよく、行政でも私たちのようなNPOでもよく、だれでもいいです。産官学民が協力し合って地域の防災力を高めていこうということを、恐らく10年くらい頑張れば絶対成果が上がってくると思います。近い将来、地震が来るかどうかは学者もだれもわかりませんが、東日本大震災を原点に、10年くらいかけて一つのことを成し遂げていくことが、今差ししかかっている課題ではないかと思っています。

いのちを守るために

- 自分の住む場所のハザード(危険)を知る
- 揺れに耐え得る備え(耐震・家具止め・飛散防止)
- 避難場所・避難ルートの確認
- 家族との連絡方法を決めておく
- 非常持ち出し品・備蓄品を準備しておく
- 地域で助け合う(しかない)
- 時間帯によっては、企業や学校等を含む「地域」
- 普段から近所の人に「あいさつ」していますか？

図17 いのちを守るために

図18の左上の写真は、地域の人が独居老人のお宅に上がり込んで家具止めしてあげている風景です。

地元の大工や建築士のような家の構造をわかっている人は、家具止めの先生でもあり、そういう方々に公民館で講習会をやってもらい、消防団や地域の役員など、さまざまな方がその講習会に参加し、まず自分の家でやってもらいます。日曜大工が好きな人もいるので、うまくできた方がボランティア登録して、その方々が4、5人ワンセットになって、やってほしいと言ったお年寄りのところへ家具止めをしにいて作業をしています。

例えば、左下の写真の棚ぐくりのたんすは、三角状の鉄板できちっと止めて、だるま落としにならないようにしようと丁寧な配慮をします。どこかの自治体では、多段組みのたんすの場合は、ガムテープを張っておきましょうと書いたパンフレットを配っていましたが、冗談ではないと思いました。あり得ないことです。そういうしっかりとした指導があり、そして地域住民で助け合ってやってみると、感謝されますからうれしいです。ボランティア活動して、感謝されてうれしいという、単純行動のやりとりが地域の中でないといけないと思います。

一方で、拒否するお年寄りは本当に頑固です。大体お年寄りの一人暮らしのところは家具止めはしないです。ある地域で民生委員を通じて家具止めをやってあげると周知したところ、何人かは手が挙がりましたが、ほとんど手が挙がりませんでした。まず、一人暮らしのお年寄りは、自分の手の届く範囲に何でも置いてあり、人が上がってくると片づけないといけませんから億劫になります。民生委員が家具固定を口説いても駄目で、地震が来たら天命と言ってかわされます。でも負けてはいられないので、あのおばあさんの家具止めをどうやって実現できるかを地域で作戦会議します。実は地域はすごくて、あのおばあさんは、毎週木曜日に来るヘルパーに頭が上らないということをだれかが知っていて、ヘルパーに、「ここにたんすが置いてあると危ないので、せめて移動するか止めさせてくださいとおばあさんに言っているのですが、おばあさんはうんと言わな

い。」と説明すると、ヘルパーが「私が言ってあげる。」といって、「やらなきゃ駄目よ。」と言っていて、おばあさんに、「わかりました。やります。」と言ってもらいました。そういう人も地域には必要なのです。

防災というと消防部局、福祉というと福祉部局みたいになるように、行政の縦割りに感じますが、現実とは全然違います。やはり総合的にやらなくてはいけないので、総務課も消防も福祉も学校もみんな一体となるような横串をどうやって地域に刺していくかが非常に大事です。もちろん子供たちにもさまざまな体験をさせることが必要です。図17の右上の写真は、おばあさんが、「火事だー、助けてー。」と大声で叫んでいます。そして騒音測定器をつけて、やかましい人が勝ちという競技にして、おもしろい運動会にしています。また、最後のバケツリレーは非常に盛り上がります。朝までは全然知らなかった方々も、同じ地域のチーム対抗にするとみんな燃えてやります。バケツリレーが本当に災害現場で役立つかどうかは分かりませんが、地域の結束力を高めるという意味ではバケツリレーは有効な手段なのです。みんな必死になって、6チーム対抗でやって、90リットルのポリバケツ2杯を一番早く満杯にしたチームが勝ちとしています。消防部局が大型の水槽を持っていますから、そこに水を入れて放射線状に競技します。タッチの差で、ある地域が勝つと、みんな万歳万歳と、朝初めて出会った人たちが抱き合っていて喜んでいて。それで、何でそんなに頑張れたのですかと優勝したチームに聞いたところ、優勝賞品がバケツだったからなどいろいろ言います。まじめな話だけでは防災は駄目で、もらえる、食べられる、当たるなどがないとみんな来ません。そうした機会をどんどんつくっていくというのが私たちの発想の中にあります。

11. キーワード①子ども（特に中学生）・女性

図19のように、防災には、マンション対策や、中学生の活用や、特に女性の活用が大事です。地域の自主防災組織といっても、おじいさんがほとんどです。ある程度の企業の部長や社長など、地位を持った方がいきなり地域に飛び込んできて、腕を組んでお前やれみたいなことを言っても通用しませんから浮いてしまいます。その点女性は、しゃべりながらどんどん物事を進めていきます。そういう力は男性、女性、それぞれ特技があると思います。

このマンションの住民も、「マンションママ」ができました。最初話をするためにうかがったのですが、ロックしてあるので、この敷地に入れません。どうやって入ろうかと、市の担当者といろいろなルー



図18 様々な防災・減災活動

トを探って、まずはマンション組合の理事長に電話をしたら、「理事長は今私がなっているけど、こんなもの毎年全然変わっていきます。このマンションで防災訓練やりたいといってもだれもやりません」みたいな話を最初は言われました。それでも、1回だけでいいから話を聞いてくださいということで防災講演会を行い、マンションはこんなに揺れます、10階で血を流したらだれが運びますか、エレベーターは止まりますという話をしたら、一番反応したのがお母さん方で、お母さん方は勉強会をつくったのです。

避難訓練も、準備が整っていく中で、この梯子車がある意味パフォーマンスとして来しました。こんな高価な車は、西三河地域に1台しかありませんから、地震時にこのマンションに来るとは限りませんが、訓練だとしても、来るとみんな喜ぶので来てくれました。でも本番は、写真のようにマンション備え付けの梯子で下りてこなくてはいけないので、訓練とはいえ、梯子を使って下りてくるためには、全部屋の了解をとらなくてはいけないのですが、このお母さんたちが全員の了解をとったのです。「やろうということ」が地域づくりなのです。



図19 キーワード①「子ども(特に中学生)・女性」

12. キーワード②次代を担う人に生きる智慧を

最後に、伊勢湾台風、三河地震、1944年東南海地震など、愛知県はさまざま大きな災害を経験している地域です。今の子供たちは、昔、川だったところが暗渠になったということも知りません。井戸も見てもないかもしれません。地域の郷土史家が子供たちに「名古屋市千種区に末盛通りというのがあるが、その末盛通りの「末」は須恵器のスエから来ており、昔はここに人が住んでいて、いろいろ土器が出てきました。」という話をすると、子供たちは目を輝かせて聞いていました。親から子へ、子から孫へというように、この地域の特性や、この地域で昔

何があったのかを教えて、この地域を子供たちがもっと愛着を持てるように、そして、そういう話から防災に切り口を持つていくことも取り組みとして必要です。

図20の左下は、半田商業高校の生徒の防災訓練の一貫ですが、生徒が、伊勢湾台風や、三河地震のことを知らないというのです。半田ではとても大きな被害を受けていたのですが、その学校に通っている半田市民あるいはその周辺の子供たちが、そんなこと知らないというのはおかしいということで、子供たちのおじいさん、おばあさんに、その当時の話を聞いてきなさいという宿題を出しました。しかし転校生もいるし、おじいさん、おばあさんから話を聞けない人もいます。そういう子供には、地域の方々に学校に集まってもらい、当時の話をしてもらいました。子供たちは学校でそういう話を聞きたいといった学生が20名いて、しゃべりたいという人は50人くらいいて、役割を持ってやっていただくとみんな話をしてくれました。

後の時代を担う人に生きる知恵を持たせないのが怖いです。昔はお葬式で100人分の炊き出しなどやりましたが、今はセレモニーホールだからほとんどやっていません。しかし先ほど、中越地震のときにはみんな釜鍋を持ち寄ってやりましたという話をしましたが、こういうことができる地域が災害時にも強いということを考えると、今地域づくりの中で何をしなくてはいいかが見えてくると思います。



図20 キーワード②「次代を担う人に生きる智慧を」

13. ターゲットは今の若者・将来の人

終戦や伊勢湾台風の記憶者は、現在最後の年代になっています。もし今度来る南海トラフ巨大地震が20年後に来るとするならば、今の39歳の方は59歳になっています。つまり阪神・淡路大震災のときに19歳だった若者が今は39歳になっており、そして

20 年後には 59 歳になっています。同じように、東日本大震災のときに生まれた赤ん坊が 20 年後には二十歳になります。その親たちの年齢が 23 歳なら、20 年後に 43 歳になります。つまり、この若い年代に対して防災をどうやって意識づけるかをやらなくてはいけないのに、実際の地域で頑張っている人たちは年齢が高い年代が多いです。この年代の方々は伊勢湾台風の経験、東南海地震、三河地震、戦争の体験をちゃんと若い年代に伝えていっていただきたいです。

半田商業高校の中でそうしたお話し合いをしていただく中で、高校生は何と言ったと思いますか。地震は怖かった、台風はすごかっただけではないです。「その時代のほうが地域が豊かだったのですね。」と言ったのです。そういう学びもあるのです。みんなで助け合って、支え合って、乗り越えたという学びのほうが大事かもしれない私は思っています。

そうした伝承をしていく大事な 60 代、70 代、80 代が今の 20 代、30 代と、なかなか接点がありません。私たちのような 50 代、60 代が間に入って、しっかりとそうした継承をしていくということを最後をお願いしたいと思います。

ターゲットは今の若者・将来の大人			
トピック	現在の年齢	20年後の年齢	20年後の人口率
1944年東南海地震(+戦争)	90歳	110歳	?
1959年伊勢湾台風	75歳	95歳	約6%(85歳以上)
1995年阪神・淡路大震災	39歳	59歳	約16%
2011年東日本大震災	23歳	43歳	約12%
2034年西日本大震災(仮)	0歳	20歳	約10%
※トピックの当時年齢を20歳とした。			
【ポイント】			
・終戦や伊勢湾台風の記憶は最後の年代となっている。			
→今聞いておかなければならない。			
・阪神・淡路大震災や東日本大震災を経験した若い世代が20年後の日本社会を支える。			
→自主防災組織への参加など、地域社会との接点が必要であるが、ほとんどない。			
・これから生まれる子を含め、今の子どもは未曾有の震災を必ず経験する。			
→この子たちのいのちを守るためのあらゆる手段を講じなければならない。			

図 21 ターゲットは今の若者・将来の大人

質問① 先ほど、マンションママという話がありましたが、栗田先生は地域の中でいろいろな防災の組織づくりをしていると思いますが、もう少し具体的に教えてください。

回答① 代表的なところでお話ししますと、一つは、私の事務所の名古屋市東区の泉というところは、ほとんどマンション地域で、商業地です。でも商業地ということを経験にとって、そこに入居しているビジネスオフィスも含めて、「名古屋シェイクアウト」を提唱し始めています。愛知県も9月1日を県民シェイクアウトの日としています。シェイクアウトとは、地震が起きたことを想定して、学校でやった防災訓練と同じように、起こった時間を決めておいて、

机に潜ってじっと待つという動作をやることです。私は自分のデスクの中に腹がつかえて入らなかったのですが、みんな大人になってからやっていないので、そういうことを一回やり、机の下を片づけないといけない、もう少し大きな机にしないといけないなど、いろいろなことを学んでもらいます。こういったシェイクアウトなどをできればマンションの人たちも含めてやりたいのですが、なかなかつながりができていません。

そこで、町ぐるみでやろうと考えて、去年は名古屋の地下街でシェイクアウトをしました。止まって、しゃがんで、じっとしてみたいなプラカードを持って、単なる通行人、地下街の飲食店も含めて、多くの方が協力してくれました。やはり、本当はマンション住民や地域のつながりということを求めているのですが、とりあえず商業地域なので、そこの方々の理解を深めながら、これで3年目になりますが、一昨年が1万人、去年が倍の2万人で、今年は3万人に増やそうと準備をしています。そうやっていろいろな地域づくりの一つとして防災を活用して、シェイクアウトというのをやっています。

質問② 私は自治会の役員をやっていますが、豊橋市の自治会の加入率は大体7割くらいで、約3割の方が入っていません。全国的にも多分そのくらいだと思いますが、そういう自治会に入っていない方には情報があまり伝わりません。また、行政や我々が防災訓練をやる時、自治会に入っていない方を誘ってもなかなか参加してもらえません。そこで、一番私が気にかかっているのは、私の校区を例にとりますと、被害者の数に対して避難所の収容人数はかなり少なく、あらかじめ各町内で役員が一時避難場所に集まっていたらいい、そこからまずふるいをかけ、本当に必要な方だけを送り込むという計画をやっています。その際に、自治会に入っていない方は、直接避難所に行くのではないかとということで、自治会に入っている者が逆にはじかれることになるのではないかとことが、いつも防災関係の話をする度に一番にクローズアップされます。何かいいお知恵があればと思います。

回答② 難しい問題ですが、入らない人に入って下さいといっても無理だと思います。その様な考えの人もたくさんいる時代になったということは事実なので、それはそれとして割り切るしかないと思っています。ただし、避難所に関しては、だれでも入ってもいいことになっていますから、あまり町内会会員だけと言うと逆に訴えられてしまいますから気をつけていただきたいです。ただ、町内会会員でない人

には、町内会費などで購入した備蓄用食糧は配る必要はありませんから、その辺で少し差がつきますということを、できれば事前にその方々に何らかの方法で伝えていくなどをすべきだと思います。町内会に入らない方は、近所のつながりがうとうしいと思っていますと思うので、普段はつき合わなくてもいいけど、いざというときだけは助け合う災害時会員のようなこともこれからの時代は必要だと思います。

ある町内会長は、マンション住民がやはり町内会に入らないと怒っていましたが、これを逆手にとって、マンションの駐車場を借りて炊き出し訓練をやりました。そうしたら、おいしいにおいがするので、ベランダからみんな見るのです。そのときに、一緒に炊き出しを誘って、緊急時でもこうやって助け合えるので入りませんかという、結構加入率上がったといいます。我慢比べみたいなので、ぜひいろいろなチャレンジをしていただければと思います。

質問③ 同じく私も自治会で役員をやっていますが、海に近い地区で津波想定避難訓練をやりたいと思っています。東日本大震災のときに、足腰の弱い方、あるいは小さな子供を複数持つ方はどうやって逃げたのかを教えてください。

回答③ 私が知っているのは、すべて個別の事例ですが、ある子どもは「近所のお兄さんが私のおばあさんをおぶって逃げてくれなかったら、おばあさんは助かっていませんでした。」と訴えている子もいました。あるいは、小さな子供たちは、中学生のお兄さん、お姉さんが、おんぶして一緒に逃げてくれたり、あるいは、寝たきりの方々は、津波が来るまでに平均で30～40分ありましたので、ふだんの医療態勢の中で、連絡をとり合っていました。社会福祉協議会は知的障害者の施設の管理をやっていて、地震が起こったとき、その障害を持つ方たちがみんな帰っていく時間だったので、職員が手分けして、若い人は丘の上に避難させ、家族がない方は職員が迎えに行き、救われた方など、生き残った人の話しか聞けませんが、その人の状況を地域がよく知っている人しか救えない、地域ぐるみでしか救えないということが明らかになっています。

一方で、消防団も250人亡くなっており、この中には、水門を閉めにいったなどいろいろありますが、「おれは逃げない。」と言っている頑固じいさんを説得して、その最中に亡くなった人もいます。こういうことだけは避けたいです。だから、その人の状況をよく知っている人が基本的には迎えにいったり助けてあげたりしないといけないことがあります。でも、そういう状況であるにもかかわらず、私は逃げないなどのわがまを言わせたくない、ふだん

からの防災教育の取り組みが必要と私は被災地で感じました。

質問④ 東日本大震災で消防団の方が亡くなる可能性がある、要援護者対策をしっかりと役割を決めるのはやっていいものか非常に悩むところです。時間との勝負で、自分が助かるのに精いっぱいとなると、要援護者対策というのは自治会としてどう考えたらいいのか、教えてください。

回答④ 地域の中にどういう方々がいらっしゃる、そうした状況の中でその方を連れて逃げる場所があるか、あるいは津波が何分くらいでどのくらいのものが来るのかを逆算して、計画を立てていくしかなさそうです。漠然と恐れることはよくないので、自分が住んでいる地域のハザードをしっかりと把握して、その中で対策を練っていくしか方法はないかもしれません。消防団も、法の改正があり、自分たちは逃げてもいいとなりましたから、自分の命を捨ててまでも他人の命を守れるということとは義務化できません。でも、その前にやらなくてはいけないことを震災前からやった上で話だと思います。なかなか一概に申し上げられないので難しいです。

質問⑤ 若い世代や、災害弱者になり得る人たち、女性を防災活動に巻き込むための工夫は何かありますか。

回答⑤ 先ほど申し上げたように、その年齢に合った楽しみ方をどう付与させるかだと思います。防災ははじめに取り組んでも駄目なので、例えば九州のほうの団体は、落語の寄席をやる時に、非常袋を持って、自分の避難路で来てくださいと案内をして、避難訓練をやっています。図18の右下の写真は、消火器で水をかけるとカエルがくるくる回るだけですが、これをお祭り会場に持って行くと、子供はみんなやりたがるのです。我々は意地悪なので消火器の使い方を教えません。教えるのはお父さんですとわかった瞬間に、前の子がやっているものをじっとお父さんが見えています。そして、自分の子供の番になったら偉そうに教えています。実は親の防災訓練でもあるのです。だからプラスアルファをどうやって編み出せるか。こうやって楽しみながら学ぶということが大きな課題と思っています。私もいいアイデアが浮かびませんので、若い人たちがいろいろ考えていただければと思います。

講演2「歴史地震記録に学ぶ防災・減災ガイドについて」

愛知県防災局防災危機管理課
政策・企画グループ
山本 真一郎 氏



1. はじめに

愛知県防災危機管理課の山本です。今日お配りしました「歴史地震記録に学ぶ防災・減災ガイド」についての紹介をさせていただきたいと思います。昨年度愛知県では、このガイドを地域で防災力を高めていただくきっかけの一つとして作成しました。ガイドでは、地域に残っている過去の地震の碑、史跡、地震の被害の記録などを歴史地震記録と呼んでいますが、そういう記録を掲載して、これを見て地震を身近なもの、身の回りで過去に実際に起こったものと認識していただいて、最後は防災力の向上につなげていただくことを目的としています。今日お配りしたのは東三河編ですが、その他にも愛知県の全域編と、名古屋、尾張、あま、知多、西三河、東三河の地域編、合計7種類のガイドを作成しています。



図22 歴史地震記録に学ぶ防災・減災ガイド

2. 歴史地震記録に学ぶ防災・減災ガイドについて

図23は愛知県の全域編ですが、愛知県を六つのグループに分け、碑、史跡、市町村史等から被災のあった記録をプロットし、そういったものを地図にまとめています。例えば、東三河編では、東三河地域の地図が出てきて、東三河地域での歴史地震記録のある場所がプロットされています。そして、もう一つ開くと市ごと、地区ごとの碑や史跡などの歴史地震記録が紹介されているほか、東三河地域での地震や風水害の歴史を年表にまとめたものが記載されています。裏表紙には周辺情報をトピック的に載せるほか、地震に関するこうしたキャラクターもつくって、子供にも受け入れてもらえるようなことを考

て作りました。

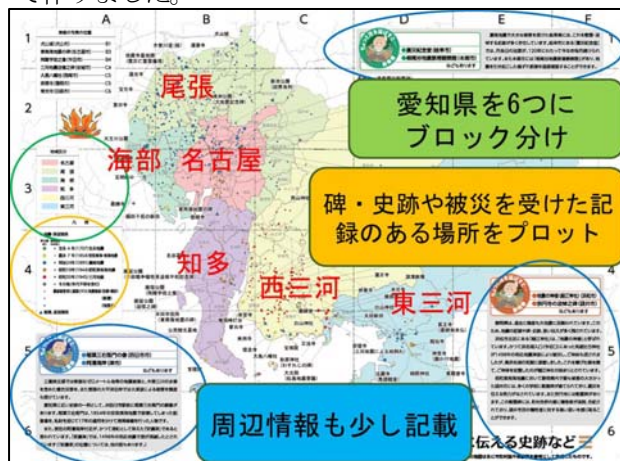


図23 愛知県全域編の内容（一部分）

東三河地域を紹介しますと、北部の中山間地は、あまり地震の碑とか史跡というのはありませんが、家屋の損壊、落石、山崩れなどが、市町村史等に残されています。南部の下流域は、沿岸部は津波の被害がありましたし、地震で大きな揺れがあり、建物が倒壊したり、地面に亀裂が入ったということが記録になっています。また、表浜のほうはいろいろな碑、史跡が残されています。



図24 東三河編の内容（一部分）

例えば、蒲郡市の形原神社に、わすれじの碑というのがありますが、三河地震後の33年目に記念事業として設置されました。こちらは三河地震で亡くなった方の慰霊、後世への警鐘として、二度とそのような被害を繰り返さないように気をつけましょうということが込められています。また、豊橋市の御厨神社にあります絵馬は、安政の東海地震の惨状を伝えるもので、安政東海地震のときに津波で流された船が木に引っかかって助かったという絵が描かれており、船が助かったことに感謝して、助かった船の部材を使って絵馬をつくって奉納したものです。さらに、田原市にある常光寺では、建物自体は特に

被害があったということはないですが、宝永地震や安政地震のときの資料がたくさん残されているお寺で、安政地震の際には写真の石垣のところまで津波が押し寄せたということも記録に残されています。



図 25 東三河編での歴史地震記録の例

3. 紙芝居、ホームページ、街歩きガイドについて

昨年度、本日の講師の栗田先生、近藤先生にご協力いただき、委員会をつくって、歴史地震記録をどのように伝えていけばよいかをいろいろ議論して、歴史地震記録に学ぶ防災・減災ガイド以外にも作成したものがああります。

一つ目は、過去の地震を子供たちに知ってもらうと考えてもらうための歴史地震紙芝居を作りました。この紙芝居は、過去の地震の時の状況を子供たちに伝えて、最後にそれを現代に置き換えるとどうなのか考えてもらう内容になっています。近藤先生にも実際の授業で使っていただいて、子供たちの反応もなかなかよく、地震のことを伝えられるようなものができあがったと思います。



図 26 歴史地震紙芝居 あしたかも！?

二つ目は、ガイドの内容を少し手軽に見られるように、地震の記録、碑、史跡をウェブ上で紹介するホームページをつくっています。ホームページの構成としては、個別の記録の内容を紹介する箇所と、その場所を示した地図があり、地図はグーグルのマ

ップと連動していますので、興味を持った碑や史跡については、この地図を見て現在地からのルートなどもわかるような形で構成されています。

三つ目は、どうやって興味を持ってもらうといいかということで、もっと簡単な街歩きガイドを作って、いくつか碑、史跡を見て歩きながら話をするという、街歩きのこともやらせていただき、今後そういうことをいろいろ企画していきたいと考えているところです。



図 27 減斎さんの歴史地震記録伝承 WEB サイト

4. 歴史地震記録に学ぶとは

最後に、歴史地震記録に学ぶということは、地震にまつわる碑、史跡、実際にその地域でそのような被害があったということが実感できることがまず一つあります。そして、先ほど警鐘という意味が込められている碑がありましたが、当時それを作った人たちが、二度とそういった被害が繰り返されないようにという思いが込められている場合が多々あります。

私もまだそこまでのイメージができる段階には達していない部分がありますが、もしご興味を持って碑、史跡をご覧になる機会がありましたら、碑、史跡の前で、実際にそういう被害があったことを実感していただくとともに、そういう碑、史跡をつくられた方の気持ちを思い起こしていただき、身の回りの備えにつなげて防災に生かしていただければと考えながら、この取り組みを進めています。

質問⑥ 今回のパンフレットや先ほどの紙芝居、街歩きガイドなど実際にお借りすることはできますか。

回答⑥ 昨年度の事業は、ガイド、紙芝居、街歩きのパンフレットをつくり、愛知県防災危機管理課の啓発グループで管理していますので、資料が欲しい方、または借りたい方は愛知県防災危機管理課にご一報下さい。

講演3「災害！ 今、できること ～地域ぐるみで『命』を守る～」

名古屋大学
減災連携研究センター
近藤 ひろ子 氏



1. はじめに

私は3年前までの38年間、知多半島で小中学校の教員をしていました。2011年3月11日は私の定年退職の20日前でした。その時、常滑市の鬼崎北小学校という、海岸沿いにある学校に勤めており、大きな揺れがかなり長い間続いていました。午後2時46分に地震が起こったのですが、6年生の担任が出張中で6年生はそのとき放課中でしたので、1階、2階の教室の担任の先生や子供たちにも声をかけながらすぐに、3階の6年生の教室まで行きました。そうしたら、ほとんどの子供たちが机の脚をしっかりと持って、机の下に潜っていました。ところが、男の子と女の子の二人だけ教室の中で「気持ち悪、気持ち悪」と言いながらうろろろしていました。潜っている子供たちが、その子供たちに対して、「あなたたちも下に隠れないと駄目だよ、教室の上からものが落ちてくるかもしれないし、ガラスが割れるかもしれないよ」と声をかけていました。

後で考えてみると、鬼崎北小学校は避難所生活体験を2回、防災体験講座を4回ほど、やってきている学校でしたが、その男の子と女の子は、2010年の10月と11月に転校してきた子どもで、全く防災の授業らしい授業や体験をしていませんでした。私は、本当に防災教育、防災学習は大事ということを実感して、その思いを持って、現在名古屋大学に勤めています。

私が防災教育に初めて携わったのは11年前の美浜町の布土小学校です。最初は2003年の愛知県の「親子で学ぶ参加体験型地震防災学習」の研究委嘱です。そして次の2004年に、布土小学校が、文部科学省の研究委嘱を全国5校の中の1校として受けることになりました。この布土小学校は1学年1クラスで、用務員も含めてスタッフ13名の小さな学校で、あまり防災のことをやってくれる人もいなかったのです。しかしこの学校には、素直で明るい子供たち、「おらが学校」と思ってくれる地域の人たち、学校のためなら何でもやってあげるというPTAの人たち、この三つの力を得て研究を続けることができました。

2. JICAでの活動

私はJICAとのつながりがあります。2004年12月26日にスマトラ沖地震が起き、そのときいろいろな国がインフラの復旧などにかなりのお金を支援し、支援合戦のようになっていました。その状況を見たJICAの代表理事の緒方貞子氏が、「日本にしかできない支援があるのではないか。それが予防的な面のコミュニティ育て、人育てというところではないか。」ということで、国の仕事として、本当に効果があるか調査をしたいという依頼があり、まずモルディブに行きました。なぜ私だったかといいますと、2003年の愛知県の研究と2004年の文部科学省の研究の中で、「お・は・し・も」の歌というCDを作り、それを活用した防災教育を進めていたからです。これは、「押さない、走らない、しゃべらない、戻らない」という合言葉を曲にしたもので、詩は子供たちがつくった防災標語の中からいろいろな言葉を組み合わせでつくり、曲は当時の数学の先生がつけました。そうした活動をしていく中で、JICAが愛知県で何かおもしろい防災教育をやっている学校があるということで、防災教育専門家として支援に入らせていただきました。モルディブでの、コミュニティ育て、人育ての防災教育がかなり効果があったということで、2006年から「タイ国防災能力向上プロジェクト」が立ち上がり、行政からのトップダウンと、学校やコミュニティからのボトムアップの両方の方策を8年間支援しました。また、2012年からはブラジルにも2回ほど行かせていただきました。

3. DCPの提案（地域と共に進めるBCP）

初めに、国土交通省の西川智先生という方のDCPの提案についてお話しさせていただきます。DCPとは、地域とともに進めるBCPととらえていただければと思います。図28では、東日本大震災は広域被害としていろいろな被害がありましたが、直接被害の推計として、約16兆9,000億円だったと言われている。

「東日本大震災」の広域被害

- ・ エネルギーと物流への障害による被害
- ・ 東北電力と東京電力2社の管内での停電と電力不足
- ・ 「計画」停電による経済被害の拡大
- ・ 福島第一事故と原子力発電への不安からの電力不足
- ・ 多数の油槽所、ガソリンスタンド被害による燃油供給網の機能停止
- ・ 太平洋側の港湾津波被害、燃油不足、鉄道被害による物流の停滞
- ・ 内陸部の多数の事業所の物的被害による生産低下
- ・ サプライチェーンを通じた被害の波及

図28 「東日本大震災」の広域被害

ます。

そうした中、今、企業の防災活動の必要性が問われています。まず、阪神淡路大震災は三連休明けの月曜日の5時46分、新潟中越地震は土曜日など、子供も家族も一緒にいた時間であり、勤務外でしたが、東日本大震災は金曜日の午後2時46分で、勤務中の職員が多数失われた組織の悲惨がありました。また、財・サービスの円滑な提供がなければそれだけで経済被害を起こしてしまうということがあり、そのためにBCPの有無が企業の運命を左右しますが、会社単独のBCPは本当に成立するののかという問題があります。実際に、東日本大震災のようにサプライチェーンの被害が多くなったこと、事業所の経済活動が地域とは無関係では決して成立しなかったということがあります。さらに、2007年新潟県中越沖地震で、水道復旧優先順位を巡る対立があったように、すべての企業の復旧はライフラインの供給が前提であり、復旧過程で地域資源を巡る競争が起こるということです。

そこでDCPとは何のために必要かということ、一つ目に地域社会への貢献活動のため、二つ目に企業や企業群の防災性向上と従業員の安全のため、三つ目に地域価値の向上のためであり、まとめると「地域貢献であると共に、地域の企業群の事業継続計画、あるいは地域の資産価値向上に貢献する計画」が必要ではないかということです。

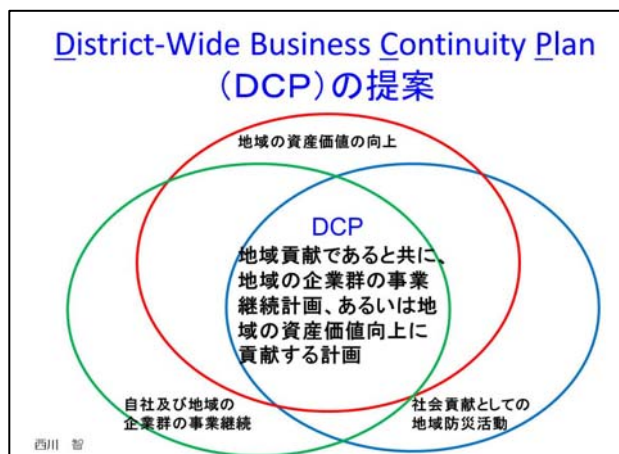


図29 DCPの提案

4. 地域ぐるみで「命」を守る

さて、DCPは確かに大事ですが、すぐに地域貢献ができるわけではないので、まずは、それぞれの企業の従業員の方は、地域の方に挨拶から始めたらどうかと思います。地域との連携の第一歩は「おはよう」と声をかけ合う、顔の見える関係づくりだと思います。そして、ボランティア、NPO、市町村の行政からのサポートをもらって、従業員、そのご家族、そして地域に向けて、防災・減災を気軽なところ

やれそうなところから一つずつ始めてはどうかと思います。

地域との連携の第一歩

「おはよう」と

声かけ合える関係づくり

顔の見える関係づくり



「防災」の第一歩

図30 地域との連携の第一歩

愛知県が2013年5月に発表した南海トラフ巨大地震での被害想定は、豊橋市では震度7で、家屋の全壊・焼失は4万6,000棟です。豊橋市の総人口は37万9,108人で世帯数は15万1,302世帯であり、家屋＝世帯数ではありませんが、15万世帯の方が住んでいるところで4万6,000棟が全壊または焼失してしまうという想定です。死者数については、豊橋市では建物倒壊1,900人、浸水・津波700人、火災500人で、合計3,000人という想定です。

そうしたことを踏まえ、目線を子供レベルに移してみると、小学生が1日学校にいる時間を、1年間計算したら、1年生はおよそ11分の1、5～6年生は部活などもやっている関係もありますが、それでも9.5分の1です。文部科学省はおよそ7分の1としていますが、実態としてはおよそ10分の1になります。それでは、あとの10分の9は子供たちは家庭、地域で生活しているということで、地域ぐるみでない子供たちの命をささげられないということになってきます。ただし、学校が地域、行政に向かって果たす役割というのは10分の1以上です。

私は防災・減災において、「その場の命が助かること」はもちろん大事ですが、その後「みんなと一緒に生き延びていくこと」もとても大事だと思います。しかし、これがなかなか難しいです。今、東日本大震災における震災関連死が問題になっています。みんなと一緒に生き延びていくにはどうしたらいいかを、考えていかなければいけないのです。

私は、防災には三つのキーワードがあると思います。みんなと一緒に生き延びていくということも含めれば、私は「命・支え合い・自ら動く」だと思います。人から言われてやる、人から教えてもらってやるのではないということです。命は、自分の命も

ほかの人の命も大切にするもので、自分の命だけ大事ということ saying it was decided to move forward smoothly. 支え合い、助け合って、そして自ら動く。自分の頭で考えて自分で行動していくことです。

もう一つ私が皆さんにお話しするのは、支援力と受援力が必要ということです。これは、「助け上手、助けられ上手になりましょう」ということです。もし助ける立場なら、合い言葉は「お互いさま」。助けられる立場なら、合い言葉は「ありがとう」。いざというときに、どちらの立場になるかわかりません。ふだんから、この二つの力を一人一人が身につけておくことが大切です。

<支援力と受援力>

★支援力(助け上手)

...合言葉は「お互いさま！」...

☆受援力(助けられ上手)

...合言葉は「ありがとう！」...

図31 支援力と受援力

5. 地震！いざというときどうする？

先ほど栗田先生の話では東日本大震災では6分揺れが続いたということでしたが、南海トラフ巨大地震はもっと長く続くと言われています。そして余震が次々に来ます。私はいろいろな学校に避難訓練を見に行きますが、先生たちが一斉放送で「地震がいったん収まりました、みんな外へ出ましょう」と放送しますが、いったん収まるという判断が本当にできるかが、疑問に思うところです。ある学校は、収まるという瞬間が見つけられないかもしれないという前提で避難訓練のやり方を考えています。

「3秒 地震だ！ 落ち着け、身を隠せ」という言葉は、地震が起こった時の対処の仕方の合言葉です。一つ目に、机などがある場合は、子供たちには「頭から潜りなさい、机の脚を両手でしっかり持ちなさい」ということは浸透していますが、和式トイレスタイルの足の裏しか着いてない状態で隠れようとしています。そうすると、長い揺れで机ごと動いてしまうので、私は「正座スタイル」になって机の脚を持つように指導しています。ただし、窓ガラスが割れているところだと危険ですので、「子供たちに、自分の頭で考えて、自分の身を守ることも教えてください。」と先生たちには話しています。中学校には、

とても体格のいい男の子が何人もいます。和式トイレスタイルだと潜れないので、担任の先生が、「正座スタイルだよ。」と言ってくれたら、潜れたという例もありました。

<机などがあるとき>

◎頭からもぐる。

◎机の脚を両手で
しっかり持つ。

◎ひざをつける。
(正座スタイル)

図32 地震！いざというとき①(机などがあるとき)

二つ目に、隠れるものがない場合は、「だんごむしスタイル」をとりなさいと言っています。避難訓練で、「頭を守りなさい。」と言われると、子供たちにとっての頭はおでこなどいろいろなことを考えているので、「正座になってだんごむしになって、一番大事な神経や血管が通っている頭の後ろと首を手で守ろう。」と言うと、子供たちはちゃんとやってくれます。

<隠れるものがないとき>

◎頭の後ろ・首の後ろ
を守る。

◎ひざをつけて、小さく
しゃがむ。

(だんごむしスタイル)

図33 地震！いざというとき②(隠れるものがないとき)

三つ目に、寝ているときに地震にあったら、とりあえずうつ伏せになることです。揺れている中でうつ伏せになるのは難しいですが、とにかく寝返りをうって、うつ伏せになります。そして枕で頭を守り、目をつぶります。しかしずっとこの体勢ではなく、逃げるチャンスができれば安全なところに逃げます。そのために、枕元には底の厚い靴、防災頭巾、非常持ち出し品などを置いておいてほしいと思います。

<寝ているとき>

- ◎**うつぶせ**になる。
- ◎**枕**で頭を守る。
- ◎**目**をつぶる。
- ※**底の厚い靴・防災頭巾・非常持ち出し品**などを**枕元**に！

図34 地震！いざというとき③（寝ているとき）

四つ目に、エレベーターに乗っているときは、すべての行き先階のボタンを押します。自動停止装置が作動する前に、運がよければ、エレベーターはいちばん近い階に止まり、ドアが開きます。

<エレベーターに乗っているとき>

- ◎**全ての行き先階ボタン**を押す。
（最初に停止した階で降りる。）
- ◎閉じ込められたら、**インターホン**で通報する。**（つながるまで何度でも通報。必ずつながる。）**
- ◎**天井からの無理な脱出は厳禁。**

図35 地震！いざというとき④（エレベーターに乗っているとき）

五つ目に、築30年以上の家にいるときは、廊下へ飛び込み、手元にあるもので何でもいから頭を守ります。そして机やソファなどのすき間に飛び込むことが重要です。何よりも家の耐震補強工事をしていただくのが一番いいと思います。

<築30年以上の家にいるとき>

- ◎**カタカタ...で、即、行動！**
- 廊下**へ飛び込む。（ガラス窓に注意！）
- 手元にあるもので**頭**を守る。
（雑誌、クッション、座布団、鍋など）
- 段差が作るすきま**に飛び込む。
（ソファ、机、いす、ベッドなど）
- 少しでも早く、**家の耐震補強工事**を！

図36 地震！いざというとき⑤（築30年以上の家にいるとき）

六つ目に、倒壊して閉じ込められた時は、とにかく何かをたたいて音を出し、そして無理に体を動かさないことです。ショック症状のときは大怪我をしても痛みを感じないので、無理して動かすと出血多量になってしまうということもあります。それから、心が折れたら終わりということで、「助かったらあそこであの鰻を食べたい」など、やりたいことをいくつも考えることです。

<倒壊して閉じ込められたとき>

- ◎何かをたたいて、**音**を出す。
（**防災用笛**・ホイッスルの音が最も効果的）
- ◎無理に体を動かさない。
- ◎**出血**の有無を調べる。
（出血していたら、布を当てて強く圧迫）
- ◎「助かったらしたいこと」をいくつも考える。（**あきらめたら終わり**）

図37 地震！いざというとき⑥（倒壊して閉じ込められたとき）

このように場所、時刻、季節（冬か夏か）など、そのときしていることによって身の守り方や必要なものは違ってきます。防災にパーフェクトはありません。普段から、もしもここで洪水が来たら、もしもここで地震が来たらと、少し想像するだけでも随分本番のときに落ち着いて、状況判断ができる力になると思います。

ところで、皆さんの家の中は安全ですか。家具の固定は本当に大事だと思います。私は「うごいてこない、たおれてこない、おちてこない」という家の中の「安全合い言葉」として「う・た・お」と覚えてもらうようにしています。小学1年生の子供たちに、まず「う・た・お」を教えるから、「学校の中でのあぶないところ探しをしてきてね。」と言うと、「図書館の本が落ちてくると僕たち怪我するよね。」など、いろいろなところをいっぱい見つけてきてくれます。家具の固定がしてあっても、たとえば、たんすの上にもものが置いてあったら、それが落ちてきます。ご家庭でも、「う・た・お」を合い言葉に、ときどきは安全チェックするといいと思います。

6. 避難するときの2つの合言葉

「い・つ・も」「お・か・に」

さて、「津波てんでんこ」という言葉がありますが、実際の学校現場では、先生たちが少し迷っていました。「津波てんでんこ」が大切なことはわかるのだが、

学校に子供たちがいるときに、「津波てんでんこ」でみんなそれぞれ勝手に避難するというでいいのかと。そこで私は、避難するときに二つのバージョンに分けてみました。リードしてくれる人がいるときは「いっしょうけんめい、ついていく、もどらない」、リードしてくれる人がいないときは「おちついて、かんがえる、にげる」と考え、「い・つ・もお・か・に」という避難の合い言葉を作りました。これは地域の方々にも使ってもらえる合い言葉だと思います。

この合い言葉をたくさんの人に覚えてもらいたくて、「い・つ・もお・か・に」という歌も作りました。この歌はCDにしてあり、希望があれば、いつでも無料進呈しています。そしてそこに、手話もつけました。手話はインターネットで見ることできます。広めていただければと思います。



図 38 地震・津波 防災ソング「い・つ・もお・か・に」

7. 避難生活について

さて、一般の方や子供たちや先生に話を聞くと、避難場所と避難所の区別ができていないようです。避難場所は、とにかく助かるために逃げるところを言い、避難所は避難の生活をするところです。

避難生活ではガス、電気、水道が使えません。要するにライフラインが止まるということで、「寝る、出る、食べる」が満足にできない状況になります。この状況をどうすればいいか、パーフェクトな答えは何もありません。例えば、水が出ないことは、手が洗えない、水洗トイレが使えないということにつながり、その結果、トイレが足りない、不衛生、におい、食欲の低下、伝染病・感染症の広がりなどが当然出てきます。

図 39 は、東日本大震災でのある町の避難所です。寒い日でしたが、仮設トイレは2日後くらいにしか来ませんでしたので、トイレを我慢することができず、みんなで力を合わせて穴を掘って臨時のトイレ

を作りました(図 40)。また、仮設トイレが到着しても、殺到してしまって使用できなくなりました。その他、テント式の組み立てトイレも、風で倒れたということもありました。図 41 のように、お年寄りは和式トイレはなかなか膝が痛くて使えないので、地域の人たちがいろいろ考えて、腰かけいすに穴を開けて、臨時の洋式トイレをつくったというようなこともありました。このことからわかるように、結局、最後は、人々の「支え合いの心」と、工夫・アイディアなのです。



図 39 東日本大震災での避難所の様子



図 40 素掘りのトイレ(仮設トイレが到着する前)



図 41 いすの座面をくり抜いて洋式トイレに！

さて、東日本大震災を参考にして、避難所の必要最小限のスペースを、計算した結果が出されています。避難した日は立っている場所を確保するために、0.5 m² (70cm×70cm) くらいは必要です。避難1～2日はせめてしゃがまないと大変なので1 m²、避難3～6日は少し横になるスペースが欲しいので2 m²、7日以上だと生活の場になってきて、荷物なども置く場所が欲しいということで3 m²は必要ということです。例えば2 m²/人という規模で県下の小中学校、公民館など、避難所として使える床面積を割ってみると、収容能力は想定される避難者数の10分の1ということです。つまり避難所に行っても、「自宅や公園などで、避難生活をしてください。」という、トリアージが行われる可能性もあります。そうすると避難所用の救援物資を、自宅避難や別のところに避難している方にどうやって届けるかが今後の問題にもなってきます。

それから、非常持ち出し品と備蓄品の区別もなかなかついていません。備蓄品として7日～10日分が必要と言われていますが、水は1人1日3L必要と言われており、例えば5人家族だと1日15Lになりすごい量になります。それを全部持って逃げるのはとても無理です。まず自分の命が大事で、その命を守るときのものが非常持ち出し品で、備蓄品は避難生活をするときのものと考えてください。

避難生活へ向けての合い言葉は、「練習と準備」です。「練習」は、「みんなで支え合い練習」、「燃料節約練習」、「寝袋で寝る練習」などがあります。それから、「簡単に食事をつくり、おいしく食べる練習」も必要です。東日本大震災の時に、子供たちは、外で鬼ごっこをやって体を温めたりしていました。「自分で温かくする練習」や、逆に暑いときのために、団扇なども入れておくことも大切です。それから和式トイレに入れない子も最近多いので、「和式トイレ練習」もしておくといよいでしょう。アウトドア体験はいろいろな練習ができて最適です。

次に「準備」についてです。「非常持ち出し品」は、とにかく身軽でないと逃げられませんので、1日分くらいがいいと思います。また備蓄品は、1日～3日分と4日～10日分で二つくらいに大きく分けておくといいと思います。

8. モノの準備 (アイデア編)

モノの準備について、初めに非常持ち出し品から考えたいと思います。まず、タオルで作る防災頭巾があります。これはバスタオルや普通のタオルを縫い合わせ、中にいくつかのポケットをつくり、そこに必要なものを入れて、頭にかぶります。しばらくは三角巾を使い、防災笛、LED ライトをつけて

おきます。縫い方は下手がいいんです。なぜかという、避難所へ行ったときに、糸を抜いてタオルとして使いたいからです。



図42 タオルで作る防災頭巾

- | | | |
|------------|-------------|--------|
| ・貯金通帳番号写し | ・保険証写し | ・わり箸 |
| ・下着用シート | ・筆記用具 | ・軍手 |
| ・ポストイット | ・ティッシュ | ・マスク |
| ・ウェットティッシュ | ・ビニール袋(大・小) | |
| ・アルミ防寒シート | ・ソーイングセット | |
| ・バンドエイド | ・携帯カイロ | ・あめ・菓子 |
| ＜縫い付ける＞ | | |
| ・Tシャツ | ・三角巾 | ・防災笛 |
| ・LEDライト | | |

図43 「タオルで作る防災頭巾」中身例

市販の、釣り用のポケットのあるベストや、カメラマンベストもすぐれものです。先ほどの防災頭巾はペットボトルは入りませんが、このベストはそのようなかさのあるものも入ります。

防災頭巾も防災ベストも両手が空くので、赤ちゃんを抱っこして避難することもできます。高浜市では自主防災会で、手づくりの防災ベストを一生懸命普及しようとしています。

図45のように、防災ベストの中身についてはいろいろありますが、歯医者さんからは「口内洗浄液も是非」と教えていただきました。東日本大震災の時は、2週間以上水道が復旧せず、歯磨きが十分にできませんでした。いっぺんに虫歯が増えてしまったのは、もちろんですが、口からばい菌がお腹の中に入り、風邪、インフルエンザ、下痢などの人が増えてしまいました。これを使うだけでも随分効果があるということです。



図44 防災ベスト

- | | | |
|----------------|-------------|---------|
| ・貯金通帳番号写し | ・現金 | ・わり箸 |
| ・保険証写し | ・筆記用具 | ・軍手 |
| (・下着用シート) | ・ティッシュ | ・マスク |
| ・ウエットティッシュ | ・ビニール袋(大・小) | |
| ・アルミ防寒シート | ・ソーイングセット | |
| ・バンドエイド | ・携帯カイロ | ・あめ・菓子 |
| ・三角巾 | ・ライター | ・LEDライト |
| ・防災笛 | | |
| ・お茶・水(小ペットボトル) | ・ラジオ | |
| ・口内洗浄液(液体歯みがき) | ・電池 | |

図45 「防災ベスト」中身例

一方、備蓄品を考えてみると、1～3日分くらいはキャスター付きのトランクを活用されることをおすすめします。物置の隅、車庫の隅に置いておけば、場所もとらず雨風に強く、すぐに運び出すこともできます。そして、中に入れておくといいいようなものは、図46のようなものがあげられます。

- | | |
|---------------------------|-----------|
| ・食料(缶詰・レトルト食品など、少なくとも3日分) | |
| ・カセットコンロ・カセットガス | ・缶切り |
| ・飲料水(一人1日3リットル) | ・衣類 |
| ・常備薬 | |
| ・懐中電灯 | ・ろうそく |
| ・寝袋 | ・簡易トイレ |
| ・ティッシュ | ・消臭剤 |
| ・タオル | ・救急用品 |
| ・除菌ウエットティッシュ(アルコール) | ・ラジオ |
| ・口内洗浄液(液体歯みがき) | ・ビニールシート |
| ・携帯電話充電器 | ・健康保険証コピー |
| ・印鑑 | ・ライター |
| ・ナイフ | ・電池 |

図46 非常時に生活するための「備蓄品」(例)

また、小さいお子さんがいるご家庭は、実際使おうとしたら小さくて使えないということが出てきます。1サイズ大きい服を購入して入れておき、そして次の年にジャストサイズになったらふだん着にして、また1サイズ大きいのをに入れておくと失敗がないと思います。

- ・**幼児服**(1サイズ大きい服を入れておく。
→ジャストサイズになったら、普段使いに。)
- ・**おぶいひも** ・**紙オムツ** ・**帽子**
- ・**粉ミルク** ・**ウエットティッシュ** ・
- ・**ビニール袋** ・**菓子** ・**水**
- ・**小さいおもちゃ** 等

図47 小さいお子さんのための「防災マザーズバッグ」中身例(例)

9. 家族みんなで楽しく「防災」

家族みんなで楽しく、ふだんの生活の中で「防災」をするということが大切です。防災は、いつ来るかわからないことに対して取り組んでいくわけですから、そのときにやる気になっても、2日目以降にやる気が下がることになるという意味がありません。だから「防災は明るく、楽しく、元気よく」を合い言葉に進めていただくのがよいと思います。

そのための例をご紹介します。まず一つ目は、「休日防災ウォーキング」があります。これは、家族みんなで非常用のおやつを持って、危ないところを探しながら、避難場所にするといいい場所を見つけるといいうウォーキングです。避難場所にするといいいところは、災害によって当然変わってきますので、地震だけではなく、大雨、洪水、雷などいろいろな条件で、家族で“ウォーキング”をしていただくのがよいと思います。

二つ目が、「休日非常食ランチパーティ」です。水道、電気、ガスが止まったという想定で、非常用飲料水やカセットコンロなどの準備をして、家にある非常食を工夫して調理をします。非常食というと乾パン、アルファ米などがついつい頭にうかびがちですが、それは最後に食べるという考えで、最初は、冷蔵庫の中のものをいかに食べていくか、次に冷凍室、最後に、食べるものがなくなったら、カロリーメイト、乾パンなどになると思います。ふだんから食べている素麺や缶詰、カップラーメンも活用できます。ライフラインが止まったという前提で、家族で、いろいろ工夫しながら、明るく、楽しく取り組んでいただくのがよいでしょう。

三つ目が「シェイクアウト」です。例えば、「正午」と時刻を決めて、家族がそれぞれの場所で、第1次避難の姿勢を3分程度とるといいうようなことです。

私は、これらのことをする「ファミリー防災デー」を年2回、春分の日と秋分の日にしませんか、と呼びかけています。例えば春分の日と秋分の日、気候が良く、ウォーキングにも最適で、洋服などの衣替えの時期です。衣服なども含めて、防災で準備す

る物を入れかえるよい機会です。例えば、冬はホッカイロも入れておくといいいのですが、夏は要りません。防災がマスコミにクローズアップされる1月17日、3月11日、9月1日などの前ですと、防災の商品が随分売り切れているということもあります。春分の日、秋分の日くらいになると、防災関連商品も店頭に充実してきます。

**「ファミリー防災デー」を、年2回
春分の日と秋分の日に！**

- ・必ず休日になる→家族みんなで、「防災」について話し合える。
- ・気候がいい→防災ウォーキングに最適
- ・＜春分の日＞冬物から春・夏物へ
＜秋分の日＞夏物から秋・冬物へ
- ・防災関連商品が充実→賞味期限付きの食品の補充も

図48 「ファミリー防災デー」を、春分の日と秋分の日！

10. 防災参考資料について

役に立つ防災参考資料として、インターネットから「愛知県の防災学習システム」、「愛知県の地震防災教育パンフレット」などが入手できます。また、「三重県の防災ノート」はよく考えて作られており、大人用としても使えると思います。「レスキューストックヤードのまめ豆知識」は読み物としてもとても楽しいです。

DVDでは、2011年に愛知県防災局から出された防災アニメ「地震は必ずやってくる」、2012年に気象庁から出された、釜石の奇跡をアニメ化した「津波からにげる」、同じく気象庁から2013年に出版された、ドラマ仕立ての「急な大雨・雷・竜巻から身を守ろう！」があります。どのDVDも短い時間でポイントがわかるようによく工夫して作られています。一般の方にも是非見ていただきたい三本です。



図49 「まめ豆知識」(レスキューストックヤード)

この三つについては愛知県下の小中学校にはすべて配付されていますが、学校で活用されているかといふかなり疑問があります。ぜひ一般の方々が、近隣の小学校や中学校へ行って、「DVDを貸してください。」とお願いいただくと、小中学校の先生方が、「いいDVDなんだ。」と見直していただけるかもしれません。是非借りに行ってください。

11. みなさんへのメッセージ

私は防災は、「命が助かる」と「みんなと一緒に生き延びていく」の二つが足し算されて始めて目的が達せられると思います。そして、そのとき一番大事なものは地域との連携で、その第一歩が、「おはよう」と声をかけ合える関係づくり、顔の見える関係づくりだと思います。

★「**命が助かる**」

+

★「**みんなといっしょに
生き延びていく**」

図50 地域ぐるみの防災とは①

私自身は、みんなで声かけ合っていく中で、「命が大事」という意識さえあれば、防災も、防犯も、いじめ防止も、交通安全も、虐待防止も、みんな原点は同じだという考え方です。私は毎朝スクールガードをやってから大学に出勤しています。最初は子供たちも「おはようございます。」がなかなか言えませんでした。だんだん声が出てきました。そして何よりもいいのは、いつも通る地域の方や自転車通学の高校生の人たちが、明るく挨拶してくださることです。車の方がわざわざ窓をあけて、「ありがとう。」と声をかけてくださったりもします。そういうことが皆さんのつながりになると信じています。

防災にパーフェクトはありません。だからこそ一人一人が「助けられる人」から「助ける人」に、「してもらう人」から「する人」に、「ついていく人」から「自ら動く人」になっていくことが大切です。命、防災の取り組みは特別なものではなく、何でもあります。手づくり防災頭巾に、どんどん改良を加えている方がいたり、「いざというときに、おいしく、あたたかい食べ物を」というコンセプトで、料理の簡単レシピを一生懸命考えている方もいます。

ほかの人のためにと考えて行動する熱い心の人た

ちが、日本全国、世界各国に確かにいます。確かにいると信じて進んでいくことが大事だと思います。みんなで手をつなぎながら、「焦らず、力まず、あきらめず」を合い言葉に一步ずつ歩いて行きたいと思っています。

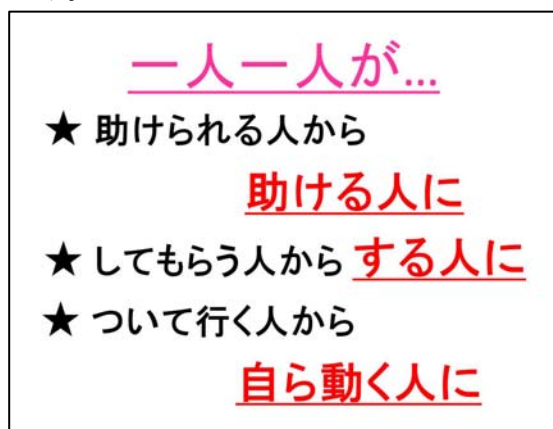


図 51 地域ぐるみの防災とは②

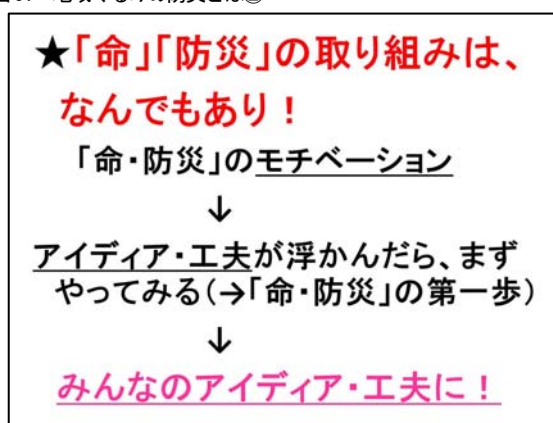


図 52 地域ぐるみの防災とは③

さて、私が JICA の調査で海外に行った時、タイ国やブラジル国の政府の方たちが、メンバーが変わっても毎回言ってくれることがあります。それは、「日本は特別な国なんだ。日本がお手本だよ。」ということです。10 年前に、タイ国政府の人からその言葉をはじめ聞いたとき、つい「どうして日本が特別なのか。どうして日本だけが手本なのか。」と訊いてしまいました。すると、彼は「日本は 60 年以上戦争していないじゃないか。原爆を 2 度も落とされ、空襲で、一面焼け野原になった中で、世界に誇れる民主主義平和国家をつくったじゃないか。そういう日本だからこそ手をつなぎ合っていけるんだ。」と言ったのです。JICA 防災教育専門家として、これまでの 10 年間で 11 回、タイ国、ブラジル国などに行かせていただきました。行くたびに人がかわっても、口々に同じことを言ってくれるのです。これまでに 50 人以上の人から、同じ内容のことを言ってもらいました。「ぜひ日本がお手本の国のままでいられたら」というのが私の願いです。

最後に、タイ国教育省副大臣が、バンコクでの防災のセミナーで、私へのコメントとしてくださった言葉をご紹介します。これは心が萎えそうになったとき、私をいつも勇気づけてくれる言葉です。

『自分の命も他人の人の命も大切にする心』『支えあい助け合って生きていく心』を、子供たち一人一人の中に、いや、国すべての人の中に育てていくことは、そのまま温かい血の通った国づくりにつながっていきます。それぞれの国で温かい国づくりをしていくことは、平和な世界づくりにつながっていくのです。みんなで手をつなぎ合ってできることから一つずつやってみましょう」

質問⑦ 近藤先生自身は今までのいろんなところで伝えていく中で、最も意識の高い方々はどのような立場の人でしたか。

回答⑦ ボランティアの方々には、防災のために本当に一生懸命やっておられます。また、特に小さいお子さんをもつお母さんは、ご主人が勤めに出ていて、もし災害が昼間に来たら、私がこの子の命を守らなきゃいけないと思っています。そのため、いろいろな情報が欲しいけれど、なかなかそういう情報を得る時間や余裕がないという悩みを持っています。それから、小さいお子さんを預かっている保育園の保育士さんも、本当に何かやらなくてははいけないという思いはとても強いです。「子どもたちが全員家族と会えるところまでは、この子たちの命は私たちが守ります」という思いを、強くもっています。でも、現実の壁はなかなか厚くて、その子たちに食べさせるものはあるのか、そのお金はどこから捻出するかという問題に直面しています。また、保育園から別の場所に逃げようというときも、たくさん小さいお子さんたちを連れてどうやって逃げるのか、そのことも大きな問題です。日ごろから、近くの小学校や中学校、地域の方々との連携を図っていくことが本当に大事であるということも、保育士さんたちに話しています。保育士さんたちの危機意識に比べると、小学校や中学校の先生たちは、まだ、なかなか火がつかません。「命・防災」に目を向ける子供たちを育てていくのなら、そういう子供たちを育てる先生も育てないといけません。

「防災学習は全然特別なことではなく、命が大事と思っているのなら、だれでもできる、どこから取り組んでもできる」ということと、「防災は地域ぐるみでの取り組みが大事」ということを、まず先生方に伝えていかなければならないと思っています。「あせらず、力まず、あきらめず」を合い言葉に、みなさんと一歩一歩進んでいきたいと思っています。